

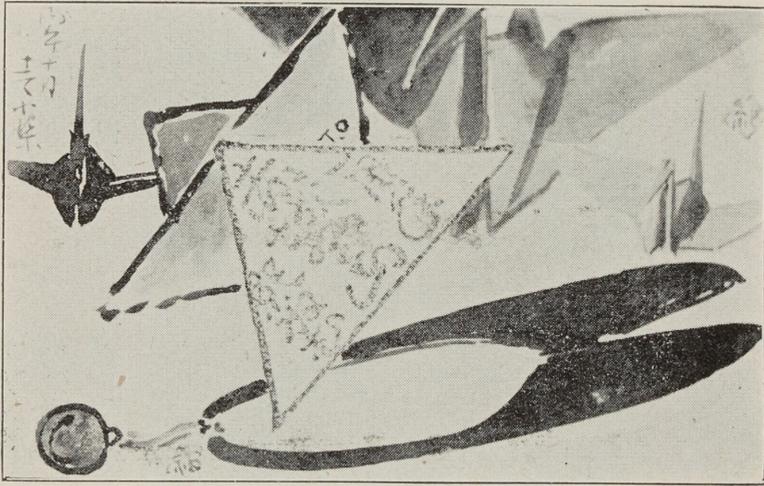
京都の水繪

栢 亭 生

關西美術會の年を追ふて盛になるのは何より悦ぶ可きことである。併しながら今秋の展覽會の水繪には、いつも多作を列ぬる處の牧野鹿子木兩氏のなくして、若干の寂しさを呈す可きに、東京より送られたる諸作の異色を添ゆるあつて、稍之を免れて居る。彼の二三年前の展覽會に出た滿谷氏の秋の川、山水無盡藏の口繪となつた丸山氏の信濃の風景、小杉氏の大同江、中川氏のボデーカラーを以つてしたる米國風景、三上氏の印象派的

作風に於ける『青梅の春』等は、既に東京の畫壇に於て諸君の眼に親しきものであらうから、今之れに就いては一言をも費すことなく専ら京都畫家の作品を考へやらうと思ふのである。

京都畫家の水繪、それは少數の指導者を戴く處の狭い畫界に免れ難き畫題と作風との單調を示して居る。其構圖に奇抜なるものは無いが、家あり木あり道あり川あつて相應にまあまりの良いものが多い。光線空氣の畫き表はしは切實とは曰れない。用筆は比較的練熟して居るが、畫中に感情は欠けて居る。只畠ばかり只森ばかり畫いたものは殆見當らぬ位である。京都



赤城周一 ねん紀念工ハガキ

の自然の清純なる色彩は、其處に住ふ處の畫家にも影響せざるを得ない、而して草木の緑は鮮かに描かれて居る。又其附近の建築物は屢寫されて居る。個々に就いて少しく所感を述べれば、場中に最傑出して居るのは、如何にしても淺井忠氏の作品である。其『古城』は在佛中の作で、渾厚なる澁味のある佳作、又敦賀に遊ばれた折のスケッチに『泊船』『干網』の數枚がある。前者の緑水に多少の批難はあるにしても、鼠色の後景より浮き出でた白帆と、日の當つた船體の描寫、物體の區劃に用ひられた軽い線など敬服に値する。後者の網の透けた具合なども人をして其輕妙を嘆ぜしむるものである。

都鳥英喜、加藤源之助兩氏のそれは、淺井氏の清淡な處を學んで居る様である。前者には『清江』、後者には『出町の冬』『岩屋の海岸』を勝れたものとする。

間部時雄氏は眞面目なる研究家である。伏見の作『秋江』と『入江』は、水際の樹木、四つ手網の小屋、筏木など能く寫されて居る。氏の綠色のインディゴ臭いのが少しく眼に障る様である。

澤部清五郎氏の作中では『水車小屋』が面白いと思ふ、光陰は明かでない。

此他榊原一廣、田中善之助等諸氏の畫に多少の見る可きものがあつたと思ふ。

樂しき一日

丸山 晩霞

田園にありて平和の自然を友とし、新しき空氣を呼吸し、しき綠を眺め居りし頃は別に異感も起らざりしが、都塵の裡なる汚穢の樹木に見馴れし眼を、田舎に轉じ山野に移すと、自然の美彩

はこのとき深き印象を頭腦に刻み込まるゝ。吾が樂しとする處のものは、いふまでも無く郊外寫生なり。古りて汚れたる市中を出て、新しき空氣と新らしき色彩に富める郊に出て、研究の筆を握ると、心身爽かになりて畫想の外何ものも無く、吾樂しみの唯一は之以上にあらざるなり。吾等の講習所は

毎日曜日に開かれ、雨なき日は何日も郊外寫生に出て、電車の便を利用すれば東の間に市外の樂土を辿り得らるゝなり。或時は品川海岸、或時は各所の花園、或時は漁船を賃して隅田河を溯り、小梅、堀切の新緑さては綾瀨の蘆花停舟を描き、隅田の堤頭船聲に興を湧かす事あり。

過ぎつる初秋隅田村田甫寫生の歸途、待乳山の夕陽を言問停船



第十九回 秋の夜 第一等

場に賞しつゝ、來る日曜日は朝來王子瀧の川々畔に寫生せん事を議り、午前八前までに上野停車場に集合する事、王子に近き人々は直に該所に行く事、吾は道順の都合より田端にて乗車する事を約して別れき。

初秋の天候は兎角に曇勝ちにて秋雨連日に涉り、樂しく待ち侘びし日は明日となれど雨の霽る可くも思はれざりき、吾は大に失望して樂しき明日を斷念するに至れり。

樂しき日とはなりぬ、夜半に聞こえし軒の垂滴の音は絶ちて、田端の森に響ける漁笛の音は何日もより近く聞へぬ、寢卷のまゝ雨戸をかへ遣れば圖らざる晴天にて、快晴の空は澄み渡りて一點の雲だに無し、天候は吾等に福したるを感謝して早速装を調ひて出發す。

秋ぞ深し。田端の森に鏘聲の蟬鳴く。汚泥の坂路を下りて停車場に入れば、上野方面より汽車到れり。時を要する事稀なれば吾時計の正時を報ず可きにあらず。今日の一行の乗れるは必ずこの漁車ならんと、續ける列車の窓に注意なすも吾を迎ふる一行の影もなし、不思議の眉をひそめて車室に入れば乗客あふれて腰を容るゝの餘席なし。三河島田甫の秋色を眺むる間に王子停車場に着。